

## ■ 編集だより

### 編集後記

昨年から編集委員の役を拝命した。このことは、責任多大で困難な役をお引き受けしたということの意味しているのみならず、「不可能な役回り」をお引き受けしたということでもある。

前者の意味を説明するのに複雑な道程は要しない。本誌は、多大な発行部数を誇る、影響力の大きい雑誌である。その雑誌を飾る論文は、やはり一定の水準を保っていなければならない。他のあらゆる論文と同様、本誌の論文の評価も結局は歴史が下すものではあるけれども、本誌の論文が、それを参照して行われた治療にむしろ悪い影響をもたらすものであったり、内部に隠された不整合が見逃されたまま客観性を僭称するものであったりするわけにはいかない。精神医学の場合さらに、ときに一見申し分のない科学性が非倫理性につながっていたり、万人の認めるような誠実さの背後に深い闇が潜んでいたりすることは、歴史が示すところである。われわれは、このような隘路にいったんは入り込みながらそれを処理する役も負っているのである。

しかし、このように述べるのが投稿の桎梏になるとしたら、もちろんそれは望むところではない。私としては、日々の臨床に少しでもヒントを与えるもの、場合によってはほんのわずかでも豊かな動機づけを与えるものであれば、それで十分原著性のある論文であると考えている。ただしこれとて、けっして遠慮がちの目標、基準の設定というわけではない。なぜならば、精神科医がそのような論文に出会うということは、それにより自分の臨床判断、臨床感覚が変わるということであり、言い換えれば、その出会いの体験は、その論文に出会う前と出会ったあとで、その読み手を変えるほどのものだという事だからである。

ここで、はじめに触れた「不可能な役回り」という問題が出てくる。われわれが本性的に保持している保守性は、そのような出会いに開かれていることを妨げ、出会いに際して複雑な否定的反応を生じさせる。進化論、量子論のような大きな科学の変革に対してそのような反応が巻き起こったことについては言及するまでもないだろうが、同様のことは、より慎ましいが重要な新しさをもった研究にもつねに生じてしまう。特に私の管轄領域である精神病理学の分野では、現在われわれにとって貴重な財産となっているような論文のかなりの割合のものに、それらが現れようとしたとき、少なくともいくばくかはそのような反応が伴ったのである。それでも

その真価を評価する心眼を持つ先達に助けられることによって、徐々に、長い時間をかけて、われわれはその価値をわれわれのものとしてできるようになったと言っても、過言ではない。

このことは、編集作業という日々の仕事にどのような危険があることを示唆しているであろうか。それは、本当にオリジナルな論文が出てきたときに、きわめて高い確率で、不整合、論証不十分、内部矛盾、論旨不明解といった、陳腐なコメントをつけてしまう可能性があることを示していないだろうか。それを避けることには、ある意味原理的な困難さがある。このことが、はじめに「不可能な役回り」という言葉で述べようとしたことである。

それでも、そのような不名誉な役回りを演じることはなんとか避けたいのである。本物のオリジナルな論考が日の目を見ることを手助けすることがわれわれの究極の願いだからである。

津田 均